九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

佐野公治著『四書学史の研究』

木村，慶二
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18116

出版情報：中国哲学論集. 15, pp.68-79, 1989-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

書評

佐野公治著『四書学史の研究』

木村慶二

一

本書は明代を中心として中国近世思想研究に活躍なさっておられる著者の初の本格的論著であり、取り上げているのは宋元明を通じての四書の学説とそれを記載した註釈書の歴史である。ただこの書は単なる四書学史の研究というよりは、宋明思想史解明のための新たな視座を四書学の歴史に求めたという性格のものだといえよう。なお本書は著者がほぼ十年間にわたって発表されてきた論文を集成・補訂されたものである。評するに当たっては全体の内容についての紹介を行ったあと、評者の意見を述べさせていただくことにする。また本書については既に三浦国雄氏による簡明な書評が存する（『創文』二九二、一九八八年）。あわせて参照されたい。

二

序章の第一節「四書学史の概況」はこの論著全体の概括となっている。著者は朱子によってはじめて四書学なるものが成立し、宋から明に至る経書学の中心は、朱子の四書学ないしは四書五経学の継承とそこからの脱却の過程であったといい、その中で大きな転機をもたらしたのが明の王陽明だったとのべる。晚明期には経書の自由解釈が流行し、仏教思想なども大幅にとり入れられた。そして清代に入り、一連の思想統制の実施が宋明学ばなれの学界動向と呼応し、四書の自由解釈を終焉させたとするのである。

第二節の「明代人と経書」においては、当時の学習の実態を再構成しようという試みがなされる。元初まではまだ孝経・語孟から六経に及ぶ学習法が一般的であった。だが、国子監の設立や科挙の実施に伴い、朱子学が民間にまで浸透していく。四書を学びしかるのちに五経を学ぶ学習法は明代初期に至って確立されたのであった。そして第二節の三に於て、学問により人格の陶冶をめざす人士があらわれても、経書学習法及び精神形成過程における経書の役割はほとんど変わらぬといったことが述べられたあと、「経書は記誦によって精神の内奥にとりこまれ血肉化することによって主体的思索を通して再生される。この営みこそ四書学、経書学に他ならなかった」(三八頁)という結びでこの章が締めくくられる。著者のめざすものが、いわゆる経学の歴史ではなく、経書学史をうみだした精神史の解明であることが、ここからも伺われる。

第一章に於ては、朱子学の広汎な注釈体系に入りこむ一つの手がかりを、『大学章句』中の「補伝」にある「表裏精粗至らざるなし」の一句に求め、そこに見られる論理と思考方法をとり出し、それらが思想体系にも一貫して流れていることを解明しようとされる。

表粗とは形而下的側面に向かう個別認識であり、裏精とは形而上的側面に向かう普遍認識である。これらは自然学のレベルでは等価値的であり、人間学のレベルでは「裏精」を上位におく価値的優劣がつけられる。この間には深い亀裂が横たわっており、この亀裂を朱子は明確に自覚していたといわれる。そしてこの二要素を人間学の優位の下に統一したのが朱子学であり、この消息を著者は「二而一、一而二」と表現された。表粗(気・陰)と裏精(理・陽)といった対立した粘着しない(互いに没交渉な)範疇について粘着する統一を求めていくのが朱子学の特質だと著者はとらえる。さて、二から一へ、二而一へと上昇し対立から統一に至るとともに、その一は再び対立の中に還元されて、一から二へ、一而二へとなる。この理念と現実、対立と統一の緊張をはらんだ循環こそが朱子学の特徴だと結論する。

次に著者の言及は、朱子の経書注釈の方法へと移っていく。朱子は経書解釈において没主観性を強調する一方、合理的批判精神といった主体性も堅持していた。この順応と批判という二つの拮抗する立場から注釈がうまれてくるという。そして朱子の注釈態度を明らかにするために「仁」の解釈をとりあげ考証が展開される。ここには「愛

の理」という統一的定義に従いつつ、しかも個別の経旨に即そうとする態度がみられるとされ、この態度は一而二、二而一の論理の裏づけをもつといわれる。すなわち個別的にしてしかも統一的な解釈方法が朱子のそれであり、一而二、二而一の論理が朱子解釈方法の中に生かされていたことを著者は論証する。最後に、この章のまとめとして「朱子の章句集注は彼の思想構造と緊密に結合する一つの完結した解釈体系であった。四書は朱子によってはじめて経書としての地位を確立し、ここに四書学が成立した」（一〇二頁）といい、朱子に於ては五経はもはや補完的地位しか与えられず、四書学はそれ自体で完結する学問体系だったとのべる。

第二章に於ては、宋元思想界に於る四書学の状況が政治的（外在的）観点、思想的（内在的）観点から論ぜられる。

第一節では朱子学の盛衰に関する考察、すなわちその党禁から従祀までの状況への検討が加えられる。著者はこの考察の中で、孔子廟への従祀が思想史にとって甚だ重要な意味をもつという。それは従祀によってその思想体系の正統性が政治的に保証され、学術の普及が政治的に加速されるからであった。他方、当時の科挙の動向にも目がむけられ、以下のようにまとめておられる。北宋初期には古注疏が尊重され、南宋代には北宋諸儒の書が基本書とみなされた。そして南宋末になると朱子の四書諸経注が採用され、元代の科挙程式において朱子学が正式に採用されたのだ、と。

第二節に於ては、まず永嘉永康のいわゆる功利学派と朱子との対立がとり上げられ、葉適は朱子の説く大学作者説を認めず、学庸の道徳的価値を否定したという。次には象山学がとり上げられ、象山の有力な後学（楊簡・錢時）も、四書を有機的連関をもつ体系的著述とはみなさなかったとのべる。（この象山学に対抗するための最も有力な武器を、朱子の高弟陳淳は四書に求めたと著者はみる）一方、朱子学派自体としてはどうだったか。門下生たちにもすでに見解の相違があり、二伝・三伝と下るにつれて朱子の経説・四書説をいかに理解するかの見解は、さらに多岐に分かれていったのである。だが巨視的に見れば朱子学派は思想学術界の支配的地位を占めていったと言われる。（象山学の栄えた四明の地にも朱子学に従う者が現われてきたことからもそれがわかる。）

この南宋から元に至る四書をめぐる思想界の状況に決定的な方向づけを与えたのが、元代の延祐年間に制定され

た科挙程式であった。皇慶二年（一三一三）中書省は科挙実施を上言し、この年条制を定め、これに従って延祐二年（一三一五）には廷試が行われた。その年の程式には、①四書に章句集注を用いる　②詩・書・易にも程朱学の注釈を採用する　③古注疏は兼用の地位に止む、などの案がもりこまれている。この程式は当時の学問状況に即して大幅に朱子学を採り、かつ困難な経書学習の負担を軽減して受験生の便宜を図ったものだという。そしてここで初めて「四書」の呼称が公式に用いられたと著者は指摘している。

第三章に於ては、これまでに多くの論考がある大学の継承と展開に関する問題について著者なりの視点からの論述がなされる。（第一～三節は紙面の都合上省略する）第四節は①作者論②テキスト論③三綱八目の相互関連性及びその概念内容という三つの観点から論ぜられる。①作者論――朱子以後、経一章は曾子、伝十章はその門人の手になると信ぜられてきたが、陽明によってより直接に孔子に結びつけられ、李材、羅汝芳に至っては孔子の親筆だと明言するようになる。また陽明門下の頃までは、大学→中庸という時代的内容的先後が考えられたが、羅汝芳になると中庸→大学の順次とされ、大学は中庸の内容をも含んだより高度な書とみなされていった。②テキスト論――石経大学の登場が大きな論議を呼ぶ。この書のすぐれた点は、(1)庸学の順次とすること、(2)子思作者説をとること、(3)文章の構成・表現に配慮していること、の三つである。そしてこのテキストは、管東溟・葛寅亮・劉念台などの信奉者が続出してゆく。この状況について、清代の学者は偽作に惑わされた明人の学識の浅陋を嘆くが、明人は史実の客観的な考証よりも自らにとって真実であるか否かに関心を注いだのであると著者は述べ、前述の事項を積極的に評価しようとする。③三綱八目の相互関連性及びその概念内容――「格物致知」を例にとり、王艮・王畿・李卓吾等の学説がとり上げられる。

以上のように明末の大学論議は、作者・テキスト・概念内容から書籍の性格に至るまで多岐にわたって行われ、当時の思想課題を附会した思想論として展開されていった。科挙に於る標準解釈としての地位を保ってきた章句の大学観は、実質的には諸解釈の一つとしての相対的地位に下げられ、自由な徹底した論議が交されていたと著者はみる。

第五節においては、まず大学の性格、礼記との関連について、陳確によって深刻な一石が投じられたことが論ぜ

られる。彼は大学を孔子・曾子の書とみなす根拠のないことを論じ、大学から聖賢の書としての神聖性を剝奪した。大学と孔子・曾子との関連を否定して製作年代を引き下げ諸儒の一書と位置づけるこの見方は、以後の有力な見解となっていった。(崔述・汪中等)このように聖賢の書或いはその親筆とした宋明の大学観は否定され、学庸の神聖性は失われた。すなわち四書学は事実上解体したのである。ただ清代でも科挙の標準解釈は朱子の章句集注におかれ、文教政策上の朱子学尊崇は国是であったことから、朱子学は依然として強大な影響力を保ちつづけた。これにより一面では四書はやはり尊崇され、聖賢の経書とする大学論、四書論が続けられてゆく。(陸世儀・馮景等)

第四章に於ては、章句集注のテキストに関する問題と、朱子以後の四書説集成書の性格・編纂方針等に吟味が加えられる。第一節――章句集注のテキストについて言えば、淳裕本と興国本の二本が源流として考えられる。興国本の文章は集注の初本なのであり、のちには淳裕系統本に改められたとし、後者を採る南宋の胡泳、興国本が定本であることを論証しようとした宋末元初の陳櫟、という風に見解は分かれている。著者は旧稿においては陳櫟説を採っていたが、再考後の結論としてどちらがよいとも決めかねるとし、意見を保留された。史的にながめれば、宋元代に於ては章句集注に異本があることが広く知られ、テキストの佳否がしばしば論ぜられていた。だが、明の四書大全が『四書輯釈』(後述)を全面的に取りこむ結果として興国本をテキストとして採用したことにより通行してゆく。以後、テキストに関する論議はあまり見られなくなっていった。清末になると呉英・志忠父子によってテキストの選定・校勘が行われ、興国本をはなれた新しいテキスト(淳裕系統本を使用)が得られた。

第二節の集成書に関しては、紙面の都合上、趙順孫『四書纂疏』と倪士毅『四書輯釈』の二つのみをとりあげる。趙順孫『四書纂疏』――成立は南宋末の一二七九をわずかに遡る時期であり章句集注を絶対視する傾向をもつといわれる。このような傾向は以後明代中期にかけての有力な潮流となってゆく。内容をみると章句集注に或問を加えそれをさらに疏釈しているため冗長な感は否めぬとコメントされる。倪士毅『四書輯釈』――陳櫟『四書発明』を継承した作品。著者はこの書における題名の変遷の問題を指摘する。すなわち『重編発明』→『会極』→『輯釈』と三変したことである。初名からは士毅の祖述的立場、三名からは士毅のオリジナルな作品という立場がよみとれると著者はいう。祖述を旨としようとする作者に対し、作品のオリジナリティを打ち出し読者の購買欲をそそろう

とする出版社。結果的に作品には営利を目的とする書坊の意向が反映されたことになる。内容的には『四書発明』に『四書通』を増纂附加する意図がみられるという。

第五章に於ては李卓吾の名を冠し中国本土にのみ現存するという『四書評』の成立及び性格に関する問題とその影響についての議論が展開される。本稿では第一第二節について言及したい。第一節『四書評』について——卓吾の死後、万暦三一～三九年の間に偽作されたものであろうが、偽作者はいまだ確定できぬという。そしてこの作品は次の四つの特色をもつ。①首尾一貫した書き下し的作品である。②評批の形式をとる。③文章の佳疵に論点をおく。④評批に簡潔で卑俗な用語を用いる。そして、高踏的な評論でなく解釈史を十分にふまえ、後世に継承されるに足るものを有したものだという。又、一方では孔孟の個性的でどぎついまでの人間臭い言動に賛意を表していると指摘し、これは〈百姓の日常〉にこそ価値を見出す明末に普遍的な人間観に立脚するという。他にも著者特有の精密な実証的考証により、①『四書評』は『説書』とともにあるいはそれ以上に明末においては一定の高い評価を得ていた。②明末の四書解に引かれる卓吾説の多くはこの『四章評』による、などの見解を導き出しておられる。

第二節『青雲堂四書評』について——著者は仲肥子なる人物。顧憲成を先輩、葉書を同輩とし、万暦末年前後に活動した人物であろう。この書には時流批判、官僚批判が散見するが、郷村にある下層の士人の生活に立脚した感慨とみるのがふさわしいと著者はみている。この作品は、註解のかたわら世相への諷刺を加え、四書の文体を伝奇平話と同列に論評し、腐儒の四書註釈に呵笑を発する破格の作品であった。（天啓年間の出版と考えられる。）

作品の特徴としては、①『評』（『四書評』の略）にみられる奇抜な用語が襲用される。②ただ、『評』の解釈をふまえつつ、独自の見解も提出される、などの点があげられる。著者はこれらについての考察を進め、以下のような特質を導き出している。①集注からの脱却という点で『評』より一歩進んだもの。②四書を題材とする思想論的性格。③経はただそこに表現された文章そのままに理解すべきだという表現相即主義。④四書は聖人の聖典ではなく言行の記録とみなされている。（「百姓の日常」に道の具体的表現を見出すという明末の特徴的思想傾向に立脚）

著者は明一代の経書理解の営みを、朱子学的経書学の無謬性信仰からの脱皮過程ととらえているが、『青雲堂四書評』をその脱皮過程の終極に位置する作品、すなわち朱子をこえる新たな経書理解に自らの経証を求めた明末思潮

の一つの成果であると高く評価している。

第六章においては、第一節において明末の良知現成論者周汝登の四書学を、第二節においては、より巨視的な視点から晩明の四書学の解明がなされる。第一節　周汝登の四書学――汝登は四書を聖人による身心の内省の記録ととらえ、経文から専ら身心に関する教説を読みとる。汝登においては、身心という色付きフィルターを通して四書を理解することが、その基本的立場となる。そして彼の四書学の特徴として、宋儒および仏教に対しての姿勢という観点から議論が展開されている。前者に対しては、次の三つの要素を指摘される。①朱註の部分的肯定。②集注に引く諸儒説や集注にとらない朱子説の肯定。③大全に採られた諸儒説の肯定(とくに程子への評価)。そして以上をまとめてこういわれる。解釈自体は折衷主義的であり『四書評』や『青雲堂四書評』に比べより穏健な四書説だ、と。後者に関しては、汝登の直下承当の哲学も甚だ禅的機鋒に富んだものだと指摘された上で、四書は汝登により当下承当の哲学書として新たな生命を賦与されたととらえる。そして、このことを仏教が中国思想史に思想的栄養を補給する一つの事例と認めたいとされている。

第二節　晩明の四書学――著者はまず隆慶、万暦以降の晩明期においておびただしい註解書が加速度的に著述出版されていったことを指摘する。そしてこれらはほとんど科挙に利用されることを期待するものであったという。註解書の増加の原因の一つを科挙受験用の需要に求めるのである。他方、釈老語が科挙の程墨文にまで使用され物議をかもしたことをとり上げる。そして、しばしば禁令が下されたにもかかわらず釈老語が場屋にもちこまれたのは、釈老語の使用によって及第をえられる可能性があったからだと推測される。こういう事態は、釈老の好尚が流行し、釈老を好む人物（楊起元、焦竑等）が高第をえて高官に任じていた状況がもたらしたものという。以上の二例からもわかるように、晩明期の四書学は科挙をぬきにしては語れないものであった。

次に著者は、註解書の内容についての言及にうつっていく。①程朱羽翼の路線を守る。②程朱を戈矛するのみならず孔子を無視する。③陽に朱子を尊び、陰に異端をまじえる。の三つを晩明の四書学展開期の様相とみている。そして共通する傾向としていずれも独自な個性的な四書説を志向するとされる。この期においては陽明学の影響が著しかったのであるが、陽明の段階に比したときの特徴の一つに、釈老思想をとり入れた奔放な解釈の存在を指摘

されている。晩明期には序文・題記から本文に至るまで釈老的観念用語を駆使して文章にあやをそえることがほとんど常識となっていた感があったこの現象の一つの理由として、著者は、釈老との接合は、当時において困難を極めていたであろう程朱学的経解からの脱却のテコであったとのべられる。

第七章においては、科挙に資する受験参考書としての講章や、試験答案、模範解答、平素の習作等の総称である時文（八股文）を通して四書学を解明しようとされる。

第一節においては、講章の具体的材料として『李滄溟四書説』がとりあげられる。著者はこの内容を三つに分類する。①陽明学に同調する明確な論調。②仏教老荘臭の濃い用語の使用。③宋儒的、集注的な経文解釈に盲従しない新たな経文解釈の提出。そして、とくに心学的陽明学的解釈に固執していると言及される。それから時文には経文に即しつつも何らかの斬新さをもりこまねばならぬという必要性を指摘され、講章とは経文解釈及び作文における模範例を示すものだととらえた上で、滄溟説のもつこうした講章的性格を具体的に考察されている。

第二節においては八股文における論理と心理の解明がまず行われる。語気口気に注目する明清時文では、①重点語、骨格句の重視と②助辞の重視とが特徴として指摘できる。他方、八股文には「対偶を用いた文体」という命題があり、見映えのする文章を作成しなければならなかった。それゆえ、重点語を把握し、題旨をうればうるほど「髄題敷衍」として忌まれ、本旨から逸脱してでも作文としての完整が求められるといった矛盾をはらんだものだった、という。

そして明末思潮にみられる四書観や清朝における実証的考証学がどのように時文八股文に投影されるかの検討がなされる。ここでは明代の事例についてふれてみたい。

まず、本体即工夫の頓悟を求め挙子業の意義を積極的には認めようとしない王畿が、挙子業を自らの聖賢の学の巾にとりこもうとしていたことが明らかにされる。そして、顧憲成の文章をひきつつ、主催者の好むと好まざるとにかかわらず、時文八股文は講学の場にも浸透していたと言及される。このように聖賢とならんことを目的とする講学と、究極的には高第を目的とする学校場屋とにおける経書観、経書理解は必ずしもかけはなれたものではなかった。

次に著者は時文を内側から革新しようとした事例として楊起元の例をとりあげる。まず起元は時文形式を借りて日常現在に於ける主体的悟得という自らの思想を表現したとの言及がなされる。その上でさらに一歩ふみこみ、彼は朱註を否定して自己主張をしているのではないと言われる。すなわち朱註に依拠すべきとする祖宗の法を遵守するのではなく、朱註を批判せずに重点を移行してことさらに朱註に抵触しないという消極的なかたちでかろうじて規則を守り、事実上は自らの経文理解を時文の上に表そうとしたとのべられる。

以上が内容のあらましである。次に本書の特色について言及したい。

三

近年、吉田公平氏「王陽明研究史」（『陽明学の世界』所収、一九八六年）、山下龍二氏「明代思想研究史」（『名古屋大学文学部研究論集一九八七』所収）等により従前の明学研究の実態をふり返ろうとする動きがある。これらはそれまでの研究の総括であると共に、その内に新しい視座の模索をはらむものであろうが、これらから言えることは、戦後の明学は哲学的思想的に研究が深められてきたということである。吉田氏の著に詳しいが、島田虔次氏による「近代思惟」という問題の提出、山井湧、山下龍二両氏による「気の哲学」の主張及びその解明、また岡田武彦氏による思想の内面的理解、体認の強調、さらに荒木見悟氏による仏教と儒教との対立・交渉等の中に見られるそれぞれの人間観・実践論の究明などである。このような現状に鑑み、かつ宋明の思想家たちの精神生活に占める経書（とくに四書）のウエイトを再認識した上で、四書の学説、それを記載した註釈書の歴史に焦点を合わせることにより、新視角による宋明思想史の叙述・解明をめざしたのが本書である。したがって本書の特色としてまず指摘すべきは、実証性・具体性の色彩が濃いという点である。第四章における章句集注テキストの歴史的変遷の究明、宋から清に至る註釈書の内容分析、あるいは第五章に見られる『四書評』の作者問題、この書の性格及び思想史的位置の解析等の詳細な論述には敬服せざるをえない。またこういった具体的・実証的考証の奥に潜む精神の粘着力・持続力も見のがせない。個別の事象のありのままを先入観なしに把握し、それに引きずられもせず客体化の作業を行い、さらにそ

の思想史における役割・位置を究明することにより個別のものから時代の普遍性を照射してゆくことは、多大な精神的エネルギーと持続する思考力を必要とすると思われる。こういった研究方針によって最も実りある成果があげられているのは、『四書評』にまつわる問題を多角的に論じた第五章と、科挙と四書学とのかかわりを時文・八股文の論理と心理を解析しながら論じた第七章第二節であろう。

次に著者の執筆意図が那辺にあるかについて評者なりに考えてみたい。まず上述したように従来の宋明学研究は哲学的思想的に研究が深められてきたわけであるが、これは何故なのか。解答の手がかりを荒木見悟氏に求めてみる。荒木氏は次のように述べておられる、「宋代の儒学が古典儒学と区別されるのは、何よりも単なる伝統経学の復興ではなくて、心学の長所をかえりみつつ、古典儒学に新生命を吹きこんだことである」(『仏教と陽明学』四九頁)と。宋明儒学とは経典の解釈をもって自己の思想を表現してはいるが、「一心万法論を基盤とし、迷悟昇沈の一切を心のあり方にかける心法の学」(同四二頁)たる仏教心学の影響を色濃く保持しているものであった。すなわち宋明学は経書解釈の仕方如何よりも、むしろそれを操作する主体のあり方自体に重きがおかれている。自己と社会との関係をどうとらえ、その中で自己をどう位置づけていくか。その具体的方法なるものは何か。こういった事柄にこそ思想家たちは心を砕き努力を重ねてきた。「心学と理学」をもって宋明儒学の大綱をとらえられる荒木氏をはじめとして、哲学的思想的に研究活動が進められてきたことは、ある意味では最も的確な視座によるものであった。ではこれらの事柄を承知の上で、著者は何故四書学史にこだわったのか。それは一つには科挙を通して中国知識人の精神生活の内奥に四書学が入りこんでいたということであろう。第三章に見られるように自己の思想を『大学』の解釈というかたちで表現したことからもそれが伺われる。もう一つは従来の哲学的探究がともすれば思弁に終始したものになっているとの反省に立ち、実証的要素をより多く含んだ具体的色彩の強い思想史の叙述を著者がめざしたからではなかろうか。著者はあとがきにおいて「……その折の閲覧は明代の著述を主としたが、さすがに先人によってよく利用されている中で、ただ経書類、とりわけ四書類の書籍は、ほとんど利用された痕跡がなかった」(四四二頁)「だが、実際手にとってみると、そこには膨大な知的エネルギーが消費されていると実感された。旧套を脱してみれば、各時代の精神的営為はそれぞれが独自の存在意義を主張できるのであって、明人のこの種の著述にも陽光

を当てる価値があり、それを抜きにしては民族的伝統の内在的理解は得られないと確信された」（同）と述べる。この文章を読む限りでは、著者はこれまであまり顧みられることのなかった四書類の意義を認め、それによって中国の精神文化の理解を深めたいと思っていたと考えられる。すなわち評者が理解するような旧来の思想史研究への反省、新しい視角設定の動機等は明確には語られていないのであるが、著者の内面に上述の意図が存したであろうと推測するわけである。ところで従来の研究で経書類に焦点を合わせたものが皆無だったのかというと、そういうわけでもない。荒木氏を例にとれば、「四書湖南講について」（『明代思想研究』所収）、「石経大学の表章」（『明末宗教思想研究』第十章）、「駁呂留良四書講義をめぐる若干の問題」（『陽明学の開展と仏教』所収）、「陳確の大学偽書説をめぐって」（『中国思想史の諸相』所収）等の論考がある。哲学的性格の考察と実証的性格の論考とは研究者個々の内において多かれ少なかれ併存するものであろう。従来このような問題は個々の事例研究の中では為されてきたともいえる。だが著者はそれを宋明学を貫く研究の中へと拡大・発展させたのである。学界に新たな一石を投じたという意味で、本書の持つ意義は大きいといわねばならぬ。

最後に若干の疑問と感想を述べてみたい。微細な点にわたるが、序章三六頁で晩明において記誦能力称讃の記事が減少したことの理由として、陽明学の影響を著者はあげている。そしてもう一つの理由として、文化の多様化に対応した知的関心の拡散をあげておられるが、このことも吾が心の良知一念に価値判断を委ねる陽明心学の影響としてとらえられはしないであろうか。陽明学によって価値判断の基準指定の枠がとりはらわれた時、明末の人々の関心は従来マイナス価値とされていた領域へも積極的に分け入ろうとしたのではないかということである。それから本書を通読した感想であるが、最も印象深かったのは本書の最大の特色でもある実証性、具体性であった。評者としては資料の丁寧な取り扱い、綿密な考証等を学ばせていただいた。これはひとり評者に限らず、宋明学研究に携わるすべての者にとって大変有益なことと思う。特に従来の宋明学研究が上述のように哲学的観点からの論考に圧倒されていただけにその価値は倍加しよう。また個別の論文を除いて、まとまった著作としてはじめて近世の四書学史が全体的に叙述されたことの意義は極めて大きいことも一言せねばなるまい。他方、巻末に附されている附録、索引も大変有益である。登科は著述の時期的上限と考えられ、成書や刊行の時期が知られることの

少ない註解書の排列基準として有効であるのだが、この方法で採られた次の二書の姓氏・書目があげられている。すなわち講章色の濃い『四書正新録』と、この書に見られない万暦後期の作品を掲載している『増補微言』である。さらに、『刪補微言』の書目及び『増補微言』の「新増姓氏書目」と、『皇明百方家問答』の書目とが一つにまとめて排列してある。それから本書中に引かれた論述・引用文献索引もそのあとに附されてある。いずれも宋明学の研究者にとって甚だ有用なものだといえよう。

以上、疑問と感想を述べてみた。評者の理解力不足のため、本書の紹介、特色の指摘等が不的確に終わったこと、また執筆意図に関して独断を並べたことについては、著者の御寛容を請う次第である。

一九八八年（昭和六三年）二月一一日発行　創文社　四四四頁（十）一七頁　八五〇〇円